

イエスのカファルナウム宣教

——ルカ4:31-44の文脈と機能——

嶺 重 淑

序

ルカ福音書においては、他の福音書とは異なり¹、イエスの公生涯（公的活動）の記述は実質的にナザレにおけるイエスの説教の場面（4:16-30）によって始められ²、その直後にカファルナウムにおけるイエスの宣教の記述（4:31-44）が続いている。著者ルカの独自の視点によって編集的に構成されたナザレ説教の記述とは異なり、このカファルナウム宣教の記述は、基本的にマルコの記述に並行していることから単なる並行記事と見なされ、ルカ福音書におけるこのテキスト独自の意味づけ等については、これまであまり問題にされてこなかった。しかしながら、マルコの並行箇所とは異なり、弟子召命の記述（5:1-11）の直前に位置するこの段落は、直前のナザレ説教の記述と同様、ルカにおいては弟子召命以前の最初期のイエスの宣教の文脈に位置づけられており、その意味でも、ナザレ説教の記述と同様にこのカファルナウム宣教の記述も、ルカ福音書全体の文脈においてそれ独自の意味づけをもち、重要な機能を果たしていると考えられる。

そこで本稿では、ルカ4:31-44の厳密な積義的検討を通して、このテキストが

1 マルコやマタイにおいては、ガリラヤでの宣教開始を告げる短い記述に続いて最初の弟子たちの召命について記され（マコ1:14-20／マタ4:12-22）、ヨハネの場合も、イエスの公生涯の記述は弟子の召命物語によって始められている（ヨハ1:35-42）。

2 イエスのナザレ説教については、拙著『ルカ神学の探究』、教文館、2012年、152-169頁を参照。

ルカ福音書の文脈においてどのような機能を果たしているかという点について、先行するナザレ説教の記述との関係を踏まえつつ明らかにしていきたい。

1. テキストの分析

1.1. 私訳

4:31 イエスはガリラヤの町カファルナウムに下り、そして安息日に人々を教えていた。32 人々は彼の教えに非常に驚いた。その言葉には権威があったからである。33 ところが、汚れた悪霊に取りつかれた男が会堂にいて、大声で叫んだ。34 「ああ、ナザレのイエス、おまえは我々とういう関わりがあるのだ。我々を滅ぼしに来たのか。おまえの正体は分かっている。神の聖者だ」。35 イエスが、「黙れ。この人から出て行け」と彼を叱りつけると、悪霊はその男を〔人々の〕真ん中に投げ倒し、彼に僅かな傷も負わせることなく出て行った。36 人々は皆驚いて、互いに語り合った。「何という言葉だろう。彼が権威と力をもって汚れた霊に命じると〔霊が〕出て行くとは」。37 こうして、イエスの噂は周辺地域のあらゆる場所に広まった。

38 イエスは会堂を立ち去り、シモンの家に入った。シモンの姑が高熱を出していたので、人々は彼女のことをイエスに頼んだ。39 イエスが彼女の枕もとに立って熱を叱りつけると、熱は彼女から去り、彼女はすぐに起き上がって一同をもてなした。

40 日が暮れると、様々な病にかかっている者を抱えている人が皆、彼らをイエスのもとに連れて来た。イエスは彼らの一人一人に両手を置いて癒した。41 悪霊たちもわめき立て、「お前は神の子だ」と言いながら、多くの人々から出て来た。イエスは悪霊たちを叱りつけ、ものを言うことを許さなかった。彼らはイエスがメシアだと知っていたからである。

42 朝になると、イエスは人里離れた所へ出て行った。群衆はイエスを捜し回り、彼のそばまで来ると、自分たちから離れて行かないようにと彼をしきりに引き止めた。43 しかし、イエスは言った。「他の町々にも私は神の国の福音を告げ知らせなければならない。そのために私は遣わされたのだ」。44 そして、ユダヤの諸会堂に赴いて宣教した。

1.2. 文脈と構成

ルカ福音書におけるイエスのガリラヤ宣教の記述の冒頭に位置するナザレ説教の記事(4:16-30)に続くこのルカ4:31-44には、直前の段落で綱領的に示されていたイエスの宣教内容の実例が記され、また、すでに4:23で示唆されていたカファルナウムでのイエスの一連の活動が具体的に描かれている。この段落は、イエスの会堂での教えとそれに対する人々の好意的な反応を述べている点で先行するガリラヤ宣教に関する要約的報告(4:14-15)と共通し、さらに、安息日におけるイエスの会堂での教えが語られ(4:16参照)、イエスの神からの派遣について言及されている点(4:18参照)において、直前のナザレ説教の段落とも密接に結びついている³。

この段落は、1. 汚れた霊に取りつかれていた人の癒し(31-37節)、2. シモンの姑の癒し(38-39節)、3. 多くの病人の癒しと悪霊の抵抗(40-41節)及び4. 巡回説教(42-44節)という4つの小段落から構成されており、最初に対照的な二つの癒しの事例が語られ(1、2)⁴、次に両者を受けて、様々な病をもつ人々と悪霊に取りつかれた人々の癒しが包括的に述べられ(3)、最後にガリラヤ(カファルナウム)から全ユダヤへと至る宣教の展望を示すことによって締めくくられている(4)。また、この段落の各構成要素は、時間的(31, 40, 42節)、地理的(31, 33, 38, 42節)記載、そしてイエスの叱責の言葉(ἐπιτιμῶ)のモチーフ(35, 39, 41節; マコ1:31, 34参照)によってマルコの並行箇所以上に相互に緊密に結びつけられ、さらに段落全体は、イエスのカファルナウム到着とそこからの退去を示す記述(31節及び42-44節)や会堂における宣教活動(教え)に関する要約的記述(31-32節及び44節)によって枠付けられ、明らかに一つのまとまりをもった段落として構成されている⁵。

3 両者はさらに、人々の当初の肯定的な反応や(22, 32節)弟子を伴わないイエスの宣教活動について記している点、人々の偏狭な利己的発想に対して福音の普遍的性格が表明されている点においても共通している。

4 最初のエピソードが、公的な場である会堂内での汚れた霊に取りつかれた男性に対する癒しの物語であるのに対し、第二のエピソードでは、個人宅での高熱に苦しんでいた女性に対する癒しの業について語られている。

5 F. Bovon, *Das Evangelium nach Lukas*, I (EKK III /1), Zürich/ Neukirchen-Vluyn

最初の悪霊追放の物語（31-37節）には、イエスの宣教活動における最初の癒しの行為が記されているが、安息日における会堂での教えという場面設定は、先行するナザレ説教の段落のそれ（4:16）と共通しており、段落冒頭のルカに特有の「ガリラヤの町」という表現は、この段落をルカ4:14のガリラヤにおけるイエスの宣教開始の記述と結びつけている。この箇所はさらに、1. 安息日におけるイエスの教え（31-32節）⁶、2. 癒しのエピソード（33-35節）、3. 人々の驚きとイエスの評判（36-37節）に区分される。そして「言葉」（ὁ λόγος）、「権威」（ἐξουσία）及び驚きのモチーフが中央部の癒しのエピソードを囲い込み（32, 36節）、地理的語句（「カファルナウム」、「周辺地域」）がこの段落全体を枠付けている（31, 37節）。

次のシモンの姑の癒しのエピソード（38-39節）は、導入部：状況設定（38節 a）、シモンの姑の病状と人々の依頼（38節 b）、イエスの癒しとシモンの姑の回復（39節）に区分され、この箇所は ἀνίστημι（立ち上がる、起き上がる）という語（38, 39節）によって枠付けられている。

これら二つの癒しのエピソードの直後に、様々な病人と悪霊に取りつかれた人々の癒しが要約的に記されている（40-41節）。マルコが病人と悪霊に取りつかれていた人々の両者を二度に亘って並置しているのに対し（マコ1:32, 34）、ルカは両者を一応区別して記述しており、前半の40節では病人の癒しについて、後半の41節では悪霊追放について言及している⁷。そして、ガリラヤの枠を越えるイエ

1989, p. 218によると、この箇所全体は、個人に対する二つの奇跡物語（33-37節／38-39節）とイエスと群衆との出会いを語る二つの物語（40-41節／42-43節）が二つの要約的報告（31-32節／44節）によって枠付けられるという構成になっている。

6 前注のボヴァンの主張のように、冒頭の31-32節をこの段落に限らず、4:31-44を全体の序文と見なす見解も多く見られる。確かに31節に関しては、そこに記されている安息日におけるイエスの教えを習慣的行為と見なすなら、そのような理解も可能であるが、32節については、そこで強調されているイエスの言葉の権威（ἐξουσία）は明らかにこの段落（特に36節）の主題に関わっていることから難しいであろう。

7 もっともルカの文脈では、悪霊に取りつかれた人々も40節の様々な病人の中にも含まれていたと考えられる。事実、ルカにおいては悪霊憑きと身体的疾病はしばしば並置されており（ルカ4:40-41, 6:17-18; 7:21; 9:1; 13:32）、特にこの段落では、いずれの癒しの行為もイエスの叱責の言葉（ἐπιτιμῶν）によって実行されていることから何えるように、ルカは両者を実質的な意味では区別しようとしていない。

スの宣教活動を伝える最後の箇所（42-44節）は、ガリラヤにおける初期のイエスの宣教について記した4:14以降の一連の記述を締めくくるとともに、それ以降の宣教の展開を示す機能を果たしている。この段落の全体構成は以下のようにまとめられる。

【ルカ4:31-44の全体構成】

1. 汚れた霊に取りつかれていた人の癒し (31-37節)	2. シモンの姑の癒し (38-39節)
<ul style="list-style-type: none"> ・イエスのカファルナウム行きと安息日におけるイエスの教え (31-32) : 要約的記述 ・癒しのエピソード (33-35) <li style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">悪霊による「神の聖者」発言 (35) <li style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">イエスの叱責 (ἐπιτιμῶ) による癒し (35) ・人々の驚きとイエスの評判 (36-37) 	<ul style="list-style-type: none"> ・導入: 状況設定 (38a) ・シモンの姑の病状と人々の依頼 (38b) ・イエスの癒しとシモンの姑の回復 (39) <li style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">イエスの叱責 (ἐπιτιμῶ) による癒し (39)
3. 多くの病人の癒しと悪霊の抵抗 (40-41節)	
<ul style="list-style-type: none"> ・多くの病人の癒し (40) 	<ul style="list-style-type: none"> ・悪霊追放と悪霊たちの抵抗 (41) <li style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">悪霊による「神の子」発言 (41) <li style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">イエスの叱責 (ἐπιτιμῶ) (41)
4. 巡回説教 (42-44節)	
<ul style="list-style-type: none"> ・イエスのカファルナウム退去と人々の懇願 (42) ・イエスの神の国の福音宣教の使命 (43) ・ユダヤ諸会堂での宣教 (44) : 要約的記述 	

1.3. 資料と編集

前段（4:16-30）においてマルコの記事の配列から一旦離れたルカは、この段落以降、6:19まで再びマルコの記述に結びつくが、特にこの4:31-44はマコ1:21-39と緊密に並行しており、マルコのテキストがルカの唯一の資料であると考えられる⁸。なお、マルコにおいてはこの段落に先行する最初の弟子召命の記事（マ

8 マルコの他にQ資料の存在を想定するH. Schürmann, *Das Lukasevangelium*, I (HThK III/1), Freiburg/ Basel/ Wien ⁴1990, pp. 250-251に反対。

コ1:16-20) をルカは後続の5:1-11に移行させており、結果的に、このカファルナウムでのイエスの宣教活動(ルカ4:31-44)は、マルコとは異なり、弟子が同行していないことを前提に描かれている⁹。

冒頭の31-37節は緊密にマコ1:21-28に並行しており¹⁰、ルカはこの部分を、マルコの記述¹¹をもとに、文体や表現等を一部改めつつ編集的に構成したのであろう¹²。

次の38-39節は、マコ1:29-31及びマタ8:14-15に並行している¹³。ルカは明らかにマルコのテキストに従っているが、自らの視点から部分的に加筆・修正することにより、この箇所全体を編集的に構成している¹⁴。なお、シモンへの言及にも拘わらず、前述したようにマコ1:16-20の弟子の召命記事を後方に移動させたルカの文脈においては、この段階ではイエスの弟子たちはまだ存在しないことが前提とされており、そのため彼らはこの物語には登場しない。

これに続く40-41節は全体としてマコ1:32-34及びマタ8:16-17に並行している¹⁵。

9 それゆえ、段落冒頭の文章(4:31)は、マルコとは異なり、イエス単独の行為として記されている。

10 一方のマタイにおいては、マコ1:22の箇所のみマタ7:28-29に並行しているが、その他の部分については並行箇所は認められない。なおSchürmann, op. cit., p. 250は、ルカ4:31にQ資料の影響を見ようとするが、説得力に欠ける。

11 イエスの教えに関する記述(マコ1:21-22)と彼の悪霊追放物語(マコ1:23-28)は、マルコが結合したのであろう(E. Haenchen, *Der Weg Jesu. Eine Erklärung des Markus-Evangeliums und der kanonischen Parallelen*, Berlin 2¹⁹⁶⁸, pp. 86-88; Schürmann, op. cit., p. 250)。大貫隆『マルコによる福音書I』、日本基督教団・宣教委員会、1993年、62頁は、23-27節が伝承部分で、その前後の21-22節と28節はマルコの編集句であると見なしている。

12 ルカの編集句としては、「ガリラヤの町」(31節)、「言葉」(ὁ λόγος) (32, 36節)、φωνή μεγάλη (33節)、ἔα (34節)、καὶ ἐγένετο θάμβος, δυνάμει, ἐξέρχονται (36節)、ἦχος (37節)等が挙げられる。因みに33節のφωνή μεγάληは、「黙れ」というイエスの言葉(35節)と整合性をもたせるために、マコ1:26に出てくる表現を先取りしたものであろう(H. Klein, *Das Lukasevangelium* (KEK), Göttingen 2006, p. 195)。

13 このエピソードはペトロの回想に遡ると伝統的に考えられてきた。

14 例えば、καὶ εὐθύςの省略(マコ1:29参照)や「すぐに起き上がりて」(παρρηρημα δὲ ἀναστᾶσα)の挿入等がルカの編集に帰される。παρρηρημαは新約ではマタ21:19, 20を除くとルカ文書にしか見られず(ルカ10/使6)、明らかにルカ的な表現である。その他の編集作業については、後述の注解部分を参照。

15 段落冒頭の時刻の記載について、マコ1:32の「夕方になって日が沈むと」(Ὁψίας δὲ γενομένης, ὅτε ἔδυ ὁ ἥλιος)に対して、マタ8:16は「夕方になって」(Ὁψίας δὲ γενομένης)。

ルカはここでも全体としてマルコのテキストに従っているが¹⁶、マルコの記述を短縮しつつ部分的に修正を加え、さらに後半部ではマコ3:10-12にも依拠しつつ¹⁷、この箇所全体を編集的に構成したのであろう¹⁸。

ここまでの箇所ほど緊密ではないが、最後の42-44節もマルコの記述（マコ1:35-39）に並行している。その一方でマタイには並行記事は見られないが、それはマタイ独自の編集作業によるものと見なしうる。その意味でも、ルカはここでもマルコの本文を唯一の資料として用い¹⁹、これに比較的強く修正の手を加えつつ、この箇所全体を編集的に構成したのであろう。

2. テキストの内容

2.1. 汚れた霊に取りつかれていた人の癒し（31-37節）

2.1.1. 安息日におけるイエスの教え（31-32節）

ナザレからガリラヤの町カファルナウム（ルカ7:1; 10:15）²⁰へと下ってきた²¹

ルカ4:40は「日が暮れると（*Δύνοντος δὲ τοῦ ἡλίου*）」となっているが、これはマタイとルカの双方がマルコのテキストにおける二重の表記を避けた結果であろう（G. Schneider, *Das Evangelium nach Lukas*, I (ÖTK 3/1), Würzburg ²1984, p. 116）。なおマタイのみは、イザ53:4（11）の一部を成就引用として記載することによってこの要約的報告を締めくくっている

16 多くの研究者がマルコのテキストをマルコによる編集的構成と見なしているが（R. プルトマン『共観福音書伝承史Ⅱ』（プルトマン著作集2）加山宏路訳、新教出版社、1987年、230頁；田川建三『マルコ福音書（上）』、新教出版社、1972年、102-103頁；大貫、前掲書、78頁他）、ルカはさらに動作の継続を示す動詞の未完了形を多用することにより、要約的報告としての性格を一層強めている。

17 事実、このマコ3:7-12に対応するルカ6:17-19においてルカはこの箇所（マコ3:11-12）を削除している。なお、J. Nolland, *Luke 1-9:20* (WBC 35A), Dallas 1989, p. 213は、ルカはマコ6:5にも依拠していたと考えている。

18 Schürmann, op. cit., p. 254は、マコ1:32-34に類似するQ資料の存在を想定しているが、推測の域を出ない。

19 Schürmann, op. cit., pp. 256-259は、マタ4:23, 25との比較からマルコとは異なる資料（= Q資料）の存在を想定しているが、説得力に乏しい。

20 おそらくルカは、カファルナウムがガリラヤに位置することを異邦人読者に示すために、「ガリラヤの町」（31節）を付加したのであろう。その一方で、ルカはカファルナウムがゲネサレト湖畔に位置していることに言及していない（H. コンツェルマン『時の中心—ルカ神学の研究』田川建三訳、新教出版社、1965年、67頁参照）。

21 ルカとは異なりマタイは、イエスのカファルナウム移住を明確に記述している（マタ4:13; さ

イエスは、安息日に会堂（33節参照）で人々を教えるが²²、人々は彼の教えを聞いて非常に驚いたという（ルカ4:15参照）。人々が驚いた理由として、マルコが、イエスが律法学者のようにではなく権威ある者として教えたという点を挙げているのに対し（マコ1:22）、ルカは律法学者には言及せずに²³、すでにイエスの言葉自体に権威があったためと述べており²⁴、まさにこの点は後続の癒しの行為を通して、より具体的に示されることになる。

らにルカ4:23-24; ヨハ2:12も参照)。なお、コンツェルマン、前掲書、67頁は、「下った」(κατή-
λθεν) という表現について、ナザレが山の上にあるというルカの誤った情報に基づいている可能性を指摘しているが、カファルナウムがナザレより低地にあるのは明らかなので、必ずしもそのように想定する必要はないであろう(蛭沼寿雄『新約本文学演習—ルカ福音書I』、新約研究社、1989年、163頁)。コンツェルマンはそこからさらに、ルカがナザレとカファルナウムという二つの町の対照性を強調している可能性を示唆しており、Bovon, op. cit., pp. 217, 221も、その宣教が拒絶されたナザレと大きな成果を挙げたカファルナウムとの対比を強調している。その一方で、両段落の区別を強調するあまり、ルカ4:31-9:50をイエスのガリラヤ宣教として一括りに扱おうとする W. Grundmann, *Das Evangelium nach Lukas* (ThHK 3), Berlin 1961, pp. 123以下に反対。

22 マルコにおいては「すぐに(εὐθύς) 安息日に会堂に入って」となっており、一度限りの行為が表現されているが、ルカにおいてはこの点は明らかではない。確かに、ἐν τοῖς σάββαοις という複数形の表現は単数の意味でも解しうるが(E. Klostermann, *Das Lukasevangelium* (HNT 5), Tübingen ³1975, p. 66; I. H. Marshall, *The Gospel of Luke: A Commentary on the Greek Text* (NIGTC), Exeter 1978, p. 191)、複数の意味でも用いられ、さらに、ルカにおいてはεἰμίの過去形+現在分詞(ἦν διδάσκων) が用いられていることから(マコ1:22参照)、ここでは習慣的な行為が示唆されているのであろう(Schürmann, op. cit., p. 246やE. Schweizer, *Das Evangelium nach Lukas* (NTD 3), Göttingen 1982 p. 64も同意見)。

23 ルカ福音書において「律法学者のようにではなく〜」という部分が省略されている理由については、律法学者の唐突な登場を避けようとしたためであるとか、彼らを擁護しようとしたためであるとか、様々な可能性が指摘されているが、おそらくルカは、イエスの権威が彼の教えよりも言葉に関連づけられていることを強調するためにこの部分を削除したのであろう(拙論「イエスと律法学者」、*学学他編『キリスト教の教師—聖書と現場から』*(山内一郎先生献呈論文集)、新教出版社、2008年、70-71頁参照)。

24 これがイエスの権威への最初の言及であり、ある意味では、悪魔による権威(権力)の約束の誘惑(ルカ4:6)に対応している。この権威は36節では「力」(δύναμις)と並列されているが、その力は聖霊の力であると見なされる(ルカ4:14)。その意味でも、悪魔による権威の付与を拒絶したイエスは、聖霊による権威を保有していたのである。なお、ルカが特に言葉の権威を強調していることは、後続の段落において、マルコの並行箇所とは異なり、熱を叱りつけることによって(言葉によって)病を癒している点からも確認できる(ルカ4:39; マコ1:31並行)。この点についてはさらに、悪魔を叱りつけることによって子どもを癒したエピソードも参照(ルカ9:42; マコ9:27並行)。

2.1.2. 癒しのエピソード (33-35節)

33節から癒しの物語が始まるが、これは典型的な奇跡物語であり、[状況設定→悪霊の抵抗→奇跡行為者の命令→悪霊の再度の抵抗、屈服→目撃者の反応]という要素を含んでいる。

さて、イエスが安息日に会堂で教えていたとき、会堂にいた汚れた悪霊²⁵に取りつかれていた人がイエスに向かって大声で叫んだという。「ああ (ἔα)²⁶、ナザレのイエス」²⁷ (ルカ18:37; 24:19参照) と呼びかけた²⁸その霊は、「おまえは我々とどういふ関わりがあるのだ (τί ἡμῖν καὶ σοί)。我々を滅ぼしに来たのか (ἦλθες ἀπολλέσαι ἡμᾶς)²⁹」と叫ぶが、ここにはイエスとの関わりを全面的に否定しようとする悪霊の態度と敵意が表現されている³⁰。続いてこの霊は「神の聖者」³¹であるイエスの正体について言及しているが、ここではこの霊が、イエスの名称や意図のみならず、彼の由来と本性をも認識していたことが前提にされている。

25 「汚れた悪霊=汚れた悪鬼の霊」(πνεῦμα δαιμονίου ἀκαθάρτου) という表現は確かに不自然であるが、δαιμονίων (δαίμωνων) という語はヘレニズム世界の読者にとっては「神」、[神的存在]、「守護神」等を意味し、必ずしも否定的な意味ではなかった (W. Foerster, δαίμωνων κτλ., *ThWNT*, II, pp. 2-3; 使17:18参照)。そのためルカは、ἀκαθάρτου (汚れた) を形容詞的な意味で付加したのであろう。

26 一部の研究者 (例えば、Schürmann, op. cit., pp. 247-248 n. 194やJ. B. Green, *The Gospel of Luke* (NICNT), Michigan/Cambridge 1997, p. 223) は、このἔαをἐλάωの命令形と見なし、「放っておいてくれ」の意味で解している。

27 イエスが故郷ナザレの人々から受け入れられず、ナザレを立ち去ってこの場に来たというルカの文脈を踏まえると、この「ナザレのイエス」という称号は一種のアイロニーと見なせるかもしれない (R. A. カルペナー『ルカによる福音書』(NIB新約聖書註解4) 太田修司訳、ATD・NTD聖書註解刊行会、2002年、134頁)。

28 ブルトマン、前掲書、16頁、注1は、敵対者の名を知ることによって相手を上回る力を受けるといふような民間説話的な見方に基づいて、マルコ版の悪霊の言葉 (マコ1:24) は悪霊に脅かされている者が悪霊に対して用いる「防御の言葉」として理解すべきだとする O. Bauernfeind, *Die Worte der Dämonen im Markusevangelium* (BWANT 3.8), Stuttgart 1927, pp. 3-18の見解を一応受け入れている。これに対して Haenchen, op. cit., p. 88 n. 7は、悪霊がイエスの正体を知っていたなら、彼が悪霊追放者であることも知っていたはずであるから、そのように自らを防御しようとする事自体考えにくいと主張している。いずれにせよ、ルカ版においては、悪霊がイエスの言葉によってほとんど抵抗もせずに追放されていることから、このような想定は不要であろう。

29 Klostermann, op. cit., p. 66やM. Wolter, *Das Lukasevangelium* (HNT 5), Tübingen 2008, p. 202は、この文を疑問文ではなく叙述文と見なしている。

それに対してイエスが、汚れた霊を叱りつけて黙るように命じ、さらにその人から立ち去るよう命じると(使16:18参照)、その悪霊は彼を人々の真ん中に(5:19; 6:8参照)³² 投げ倒して彼から出て行った。マルコにおいては、霊は取りついていた人にけいれんを起こさせて大声をあげて出て行ったと記されているのに対し(マコ1:26)、ルカは、霊が僅かな傷も負わせることなく(声をあげずに)出て行ったと記すことにより、悪霊の無力さとそれに対するイエスの権威の優越を示すと共に、彼の癒し(奇跡)が完全なものであったことを強調している(ルカ8:33; 9:42; 11:14を比較参照)。さらにこの出来事は、ナザレ説教で告知された、捕らわれている人々の解放の宣言(4:18)を思い起こさせる。

2.1.3. 人々の驚きとイエスの評判(36-37節)

イエスの癒しの行為を目の当たりにした人々は皆驚いて³³、イエスの権威について互いに語り合う。マルコにおいては、人々は「権威ある新しい教え」について語り合ったのに対し、ルカにおいては、「この言葉はいったい何だろう。彼が権威と力をもって汚れた霊に命じると出て行くとは」³⁴と人々は驚嘆の声を上げたとあり、汚れた霊に権威(ἐξουσία)と力(δύναμις)³⁵をもって命じるイエス

30 これについては、「あなたは私にどんな関わりがあるのでしょうか。あなたは……息子を死なせるために来られたのですか」(王上17:18)というサレプタのやもめがエリヤに語った言葉を参照。

31 「神の聖者」(ὁ ἄγιος τοῦ θεοῦ)という称号は伝承に由来し(士13:7; 16:17 LXX[写本B]; 詩105(106):16; マコ1:24; ヨハ6:69)、ルカ福音書にはこの箇所でのみ用いられている(但し、ルカ1:35のἄγιος[聖なる者]を参照)。このἄγιοςと前出のἀκαθάρτοςの対照性に注意。

32 Klein, op. cit., p. 198やJ. Kremer, *Lukasevangelium* (NEB 3), Würzburg 1988, p. 57によると、この描写は単に、その場にいた人々が今や事態を観察できるようになったことを示しているに過ぎない。なおこの箇所を、Marshall, op. cit., p. 193は「部屋の真ん中に」の意味で、W. Wiefel, *Das Evangelium nach Lukas* (ThHK 3), Berlin 1987, p. 110は「会堂の真ん中に」の意味で解しているが、意味されていることは実質的に大差ないであろう。一方でNolland, op. cit., p. 207は、「イエスとの出会いの場で」という意に解している。

33 ここで用いられている驚きを表す名詞(θάμβος)は宗教的意味をも含み、新約ではルカ文書にのみ用いられている(ルカ4:36; 5:9; 使3:10)。

34 マルコでは「……汚れた霊すら従うではないか」(マコ1:27)となっている。

35 権威(ἐξουσία)と力(δύναμις)の組み合わせは、トゥキユディデス『史書』6.31.4やプラタルコス『倫理論集』283c; 337-338等の古典文献にも見られる。

の言葉に関心が向けられ、ここでも32節と同様、イエスの言葉が権威と結びつけられている。そして最後の要約的報告(37節)は、その結果、イエスの「噂」(21:25; 使2:7)³⁶は周辺地域一帯³⁷に広がっていったことを示している(4:14b参照)。

2.2. シモンの姑の癒し(38-39節)

会堂を立ち去ったイエスはシモンの家を訪れるが³⁸、ヤコブとヨハネが同行したマルコの記述(マコ1:29)とは異なり、まだ弟子が召し出されていないルカにおいては、弟子たちは誰も同行していない³⁹。もっとも、イエスを招いたと考えられるシモンのみは、同行しないまでも自宅にいたことが前提とされており⁴⁰、その意味ではこの場面は、ペトロの弟子入りを準備する機能を果たしているともいえる。

ルカはシモンの姑⁴¹が高熱に(πυρετῶ μεγάλῳ)見舞われていたと彼女の病状を強調しているが⁴²、それによって彼女に対するイエスの癒しの業が強調されている。また、マルコの並行箇所とは異なりルカにおいては、人々⁴³はイエスに、単

36 ルカの「噂」(ἄκουσις)に対してマルコは「評判」(ἀκοή)という語を用いている(マコ1:28)。

37 マルコはガリラヤという地名を明記しているが(マコ1:28)、この点はルカにおいては明らかではない。

38 K. H. レングストルフ『ルカによる福音書』(NTD新約聖書註解3)泉治典他訳、NTD新約聖書註解刊行会、1976年、147頁によると、この情景は教師を安息日の祝いの食事に招く当時の慣習に対応している(Grundmann, op. cit., p. 125も同意見)。なお、ヨハ1:44によるとペトロとアンデレはベトサイダの出身と記されており、食い違いが見られるが、ヨハネが生誕地について語っているのに対し、マルコはその後の移住先について語っているとも考えられる(J. A. Fitzmyer, *The Gospel according to Luke I-LX* (AB 28), New York 1983, p. 549)。

39 さらに、マコ1:29における「シモンとアンデレの家」がルカでは「シモンの家」になっているが、後続の召命記事(ルカ5:1-11)においても、マルコの召命記事(マコ1:16-20)とは異なり、アンデレについては言及されていない。なお、マタイのテキストにおいても弟子は言及されておらず、イエスは一人でペトロの家を訪れているが、これはテキストを短縮しようとするマタイの傾向によるのであろう(Bovon, op. cit., p. 219)。U. ルツ『マタイによる福音書(8-17章)』(EKK新約聖書註解I/2)小河陽訳、教文館、1997年、34頁と共に、ここでマタイとルカが別版のマルコのテキストを用いたとするKlein, op. cit., p. 195 n. 3に反対。

40 Schneider, op. cit., p. 115.

41 ペトロが既婚者であったことは1コリ9:5からも確認できる。

42 これに対して並行箇所のマコ1:30には、「彼女が熱を出して寝ていた」とのみ記されている。

43 ここで出てくる「人々」はマルコの文脈では、家の住人であるシモンとアンデレ、そしてイエ

に彼女のことを話したのではなく、より具体的にイエスに（彼女の癒しを）依頼しており、その意味でもこの箇所は、後続の夕暮れにおける多くの病人の癒しの記事（40-41節）の予兆となっている。

病人の枕元に立った⁴⁴イエスは、「手を取って起こす」（マコ1:31）のではなく、直前の悪霊追放（4:35）の場合と同様、ただ熱を「叱りつける」（ἐπιτιμᾶω）ことによって癒しを実行する⁴⁵。ここには身体の病を悪霊の仕業と見なす当時の通念が反映されており⁴⁶、それと共に言葉による癒しの業が再び強調されている⁴⁷。そしてその結果、熱は彼女から去って（ἀφῆκεν; 4:18参照）彼女は一同をもてなすが、ルカはここに「すぐに起き上がって（παραχρήμα δὲ ἀναστᾶσα）」という句を挿入することにより、彼女が一気に健康を回復して、他人の助けなしに自力で起き上がったことを強調すると共に、その癒しの業そのものを強調している。なお、「もてなす」（διακονέω）という行為は、単に女性の日常の仕事を意味するのみならず、自分の持ち物を出し合ってイエスの弟子たちに奉仕していた女性たちの働き（8:1-3; さらに23:49, 55も参照）を思い起こさせる⁴⁸。

2.3. 多くの病人の癒しと悪霊の抵抗（40-41節）

イエスが悪霊に取りつかれていた人とシモンの姑を癒した日の日暮れから、（おそらくイエスの奇跡行為の噂を伝え聞いて）人々は様々な種類の病人たちをイエスのもとに連れて来た（40節）⁴⁹。マルコの並行箇所には「町中の人々が戸口に

スに同行したヤコブとヨハネを指していることは明らかだが、彼らに言及していないルカの文脈では誰のことか（ペトロの家の住人？）明らかではない。

44 Bovon, op. cit., p. 224は、ἐπάνω αὐτῆςを伴う動詞 ἐφίσημιは「かがみ込む」という意味で解すべきだと主張している。因みにこのἐφίσημιは、新約用例21回中18回がルカ文書に見られ（ルカ7/使11）、明らかにルカ的である。

45 マタイにおいては、イエスは彼女の手に触れることにより癒しを実行している（マタ8:15）。

46 W. Foerster, δαίμων κτλ., ThWNT, II p. 7 n. 53参照。

47 Klein, op. cit., p. 200は、ルカのイエスが言葉のみによって癒しの業を実行したのは安息日であったためと主張しているが、説得力に欠ける。

48 Wolter, op. cit., pp. 204-205は、このδιακονέωを食事の給仕の意味ではなく、広く他者に対する奉仕の意味で理解すべきであると主張している。

49 ユダヤ教会においては、日没において一日が終わって次の日が始まると考えられていることから、ここでは安息日（31節参照）の終わりが意味されている。それゆえ、日が暮れて

集まった」とあるが（マコ1:33）、ルカはこの一文を削除している⁵⁰。さらに、マルコとは異なりルカは、イエスはそれらの病人一人ひとりの上に手を置いて（ルカ13:13; 使9:12, 17; 28:8参照）彼らを癒した⁵¹と記すことにより、連れて来られたすべての病人たちをイエスが受け入れ、個別に癒したことを強調している。

悪霊追放については後半に入って初めて言及される（41節）。マルコとは異なり、ルカはここで、悪霊たちが追放される際にわめき立て（*κρ[αυγ]ύζω*）⁵²、「お前は神の子だ」と叫んだと述べている（マコ3:11; 5:7; さらにルカ1:32, 35; 3:22; 4:3, 9参照）⁵³。また、マルコにおいては、イエスは悪霊がしゃべることを許さなかったとのみ述べられているのに対し、ルカはこれに「（イエスは）悪霊を叱りつけて」という表現を付加することにより、その禁令を強調している（ルカ4:35参照）。さらに、マルコによるとこのイエスの沈黙命令は、悪霊がイエスを知っていたことに起因するが、ルカによると、イエスがキリスト（＝メシア）であることを悪霊が知っていたという理由によっており、その意味でもここでは、イエスの神の子性とメシア性が緊密に結びつけられて捉えられている（ルカ22:67-70参照）⁵⁴。そして、この沈黙命令その

から人々が病人を連れて来たという物語の設定は、少なくともマルコのレベルでは安息日に物を運んではならない（エレ17:21-22）という戒め（あるいは安息日に病人を癒してはならないという戒め）との関係のためであろう。その一方で、カルベパー、前掲書、135頁は、ルカ自身がこの点を意識していたかどうか疑わしいとしており、Schürmann, op. cit., p. 253 n. 242は、ルカはこの点を理解していなかったと主張している。

50 「町中の人々」という誇張表現の不自然さを避けるためにルカはこの箇所を削除したのであろう（Fitzmyer, op. cit., p. 552）。因みにルカは、多くの人々が戸口の辺りに集まって来たというマコ2:2の同様の描写も、その並行箇所（ルカ5:17）で削除している。

51 ルカにおいては、ここで初めて（言葉によるのではなく）行為による癒しの業が描写されている。なお、手を置く動作と癒しの結合はヘレニズム世界の文献によく見られるが、その一方で新約時代以前のユダヤ教文書には見られない（クムラン文書「外典創世記」20.22, 29のみ参照）。一方でMarshall, op. cit., pp. 195-196は、イエスが手をとってシモンの姑を起こしたというマコ1:31の記述の影響をここに見ようとしているが、説得力に乏しい。

52 Bovon, op. cit., p. 225によると、ここでは騒々しさではなく、恐れもしくは宗教的緊張が示唆されているという。

53 Schürmann, op. cit., p. 253は、この叫びを、イエスの優れた力を目の前にして自らの敗北を認めた悪霊の告白と解しているが、説得力に乏しい。

54 ルカ4:33-34における「神の聖者」もこの関連において捉えられている。なお、三好迪「ルカによる福音書」、高橋虔他監修「新共同訳 新約聖書註解I」、1991年、288-289頁によると、悪霊が発した「神の聖者」と「神の子」はルカ1:35の「聖なる者、神の子」に対応している。

ものは、イエスの神の子性は彼の受難、復活までは理解されないという理解に基づいているのであろう⁵⁵。

2.4. 巡回説教 (42-44節)

前出の「日が暮れると」(ルカ4:40)という表現と同様、ここでも「朝になると」(γενουμένης ἡμέρας)⁵⁶という時間を表す表現によって新しい段落が始められるが、この点は、一晩中イエスが病の癒しと悪霊追放に従事していたことを示唆しているのであろう⁵⁷。朝になってイエスは、人里離れた寂しい場所へと出て行く⁵⁸。マルコにおいては、イエスの弟子たち(シモンとその仲間)がイエスの後を追ひ、彼らはイエスに、カファルナウムの人々が彼を捜していることを伝えるが(マコ1:35-36)、まだ弟子が召命されていないルカにおいては、イエスを捜してその場にやってくるのは群衆(カファルナウムの住民)である。彼らはイエスに、自分たちから離れず、留まるように懇願するが、このような彼らの態度は、イエスを崖から突き落とそうとしたナザレの人々の態度とは対照的である。もっとも、カファルナウムの人々にしても、単なる利己的な発想からイエスを自分たちのもとに引き留めようとし、イエスの宣教の本質を理解していなかったという点では、ナザレの人々と同様であったと見なすべきであらう⁵⁹。

55 例えばMarshall, op. cit., p. 197は、真実が悪霊によって証言されることを避けるために沈黙命令が出されたと考えている。その一方でBovon, op. cit., p. 225によると、この沈黙命令は、信仰拔きの告白の無意味さを示そうとしているのではなく、神を知る悪霊は神の権威に委縮しているために自らの信仰を印象付けようと敵を撃退する手段としてその告白を用いようとしていることを示しているという。

56 マルコにおいては「朝早くまだ暗いうちに」とあり(マコ1:35)、まだ夜が完全に明けていなかったことが強調されている。なお、このルカの表現は新約ではルカ文書にのみ見られ(使12:18; 16:35; 23:12)、いずれも直前の段落で夜の出来事が話題にされているときに用いられている。

57 Schneider, op. cit., p. 118やKremer, op. cit., p. 59も同意見。

58 祈りはルカにとって重要なテーマであるが(ルカ3:21; 5:16; 6:12他)、ルカはここでは、イエスが祈っていたというマコ1:35の記述を削除している(ルカ5:16に移行?)。おそらくルカは、イエスが一時的に人里離れた場所に出て行ったのではなく、カファルナウムを去ろうとして出て行った状況を想定しているために、祈りに関する記述を削除したのであろう(Nolland, op. cit., p. 216; Kremer, op. cit., p. 59)。

59 Green, op. cit., p. 221も同意見。

そこでイエスは群衆に対して自らの派遣の使命について語る⁶⁰。すなわち、他の町々（< πόλις）にも神の国⁶¹（マコ1:15参照）の福音を告げ知らせなければならず（δεῖ）、まさにそのために神から遣わされたというのである⁶²。マルコにおいては、あくまでもイエス個人の意志として「近くの他の町々」（マコ1:38）⁶³に赴くことが表明されているのに対し、ルカにおいてはそれは神の意志であり、福音宣教のための油注がれた者としての神からの派遣（ルカ4:18参照）であることが強調されている。

最後の44節は、ユダヤの諸会堂におけるイエスの宣教について要約的に報告されているが、並行箇所のマコ1:39に対して、ルカは以下の二点において変更を加えている。一つには、イエスの活動内容としてマルコにおいては「宣教」と並列されていた「悪霊追放」を省略した点であり、これによって、神の国が宣べ伝えられる宣教に焦点が当てられると共に、ルカにおける「宣教」が狭い意味での教えに留まるものではなく、言葉と行為によるものであることが示される（ルカ4:31-44参照）。もう一つは、イエスの宣教場所に関して、ルカはマルコの「ガリラヤ中の会堂」を「ユダヤの諸会堂」に書き換えている点である⁶⁴。こ

60 マルコにおいては、弟子たちに対して宣教活動に同行するように呼びかけられている（マコ1:38）。

61 「神の国」（ἡ βασιλείαν τοῦ θεοῦ）という表現はルカ福音書に計34回用いられるが、ここで初めて現われる。なお、εὐαγγελίασθαι τὴν βασιλείαν τοῦ θεοῦ（神の国の福音を告知する）もルカに特徴的な表現である（ルカ9:2, 60; 16:16; 使8:12他）。

62 ルカはここで初めてイエスを神の国の福音の宣教者として描いている。ルカのパウロも告別説教において、彼の活動を神の国の宣教と見なしており（使20:25）、また使徒行伝の末尾でも、パウロが神の国を宣教し続けたと記述されている（使28:31）。なお、神の国の宣教と悪霊追放の関係については、「私が神の指で悪霊を追放しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ている」（ルカ11:20）というイエスの言葉を参照。

63 ルカの「他の町々（πόλις）」に対してマルコにおいては「近くの他の町々（κωμόπολις）」となっているが、この点はマルコにおいてはガリラヤにおける宣教が想定されている点（マコ1:39）に対応している。なおκωμόπολιςは、まだ都市とは認められていない大きな村を指している。

64 確かに写本の中には「ユダヤ」ではなく「ガリラヤ」とするものもあるが（A, D, Q 他）、それらは明らかにマコ1:39の記述と調和させようとする二次的な改変である。この箇所の記述をめぐってはしばしば議論されてきたが、それは本文批評上の問題ではなく、記載内容を理解することの困難さに起因している（Völkel, Der Anfang Jesu in Galiläa. Bemerkungen zum Gebrauch und zur Funktion Galiläas in den lukanischen Schriften, ZNW 64, 1973, p. 225）。

こでのユダヤはガリラヤを含むパレスチナ全域（あらゆるユダヤ人の居住地域）を指しており（ルカ1:5; 6:17; 7:17; 23:5; 使10:37他参照）⁶⁵、これによりイエスの宣教活動が狭いガリラヤの枠を越えてユダヤ全土に拡大していくことが強調されている⁶⁶。

3. イエスのナザレ説教とカファルナウム宣教

イエスのナザレ説教の記述（4:16-30）とそれに続くカファルナウム宣教の記述（4:31-44）は、往々にして相互に区別されて別個に扱われ、しばしば、ナザレ説教の記述のみが重要視されてきた。しかしながら、すでに指摘したように、ルカの文脈においては双方とも最初の弟子が召し出される以前のイエスの宣教活動の記述であり、弟子がまだ存在しないことを前提として語られている。その意味では、これらの記事は両者でルカ福音書における「弟子召命以前のイエスの宣教」の枠を構成しており、最初の弟子たちが召し出された以降のイエスの宣教活動について語る5:1以降の記述とは明確に区別される。さらに、これら双方の記述は、安息日における会堂でのイエスの教えという場面設定において語られている点（4:16, 31）、自らが神から派遣されたことについてイエス自身が証言している点（4:18, 43）においても共通している。

その一方で、双方の記述には相違点も認められる。例えば、奇跡行為の実践がイエス自身によって拒絶され、結果的に言葉によるイエスの教えが強調され

65 この一方でコンツェルマン、前掲書、69-70頁は、こでのユダヤはガリラヤから区別されるユダヤ南部地域を指しているのみならず、ユダヤ以外の地域からは限定的に区別されていると述べている。

66 この点に関して Völkel, op. cit., pp. 222-232は、厳密な意味でのガリラヤ宣教は4:43までで、ルカの視点はそれ以降明らかにユダヤ全土に向けられ、そこではガリラヤは宣教活動の起点以上の意味は持ち得ないと主張しており、同様の趣旨からシュールマンの注解書も、3:1-4:44（「ガリラヤからの始まり」）と5:1-19:27（「ユダヤ地方における公的活動と教え」）とを明確に区分している（Schürmann, op. cit., pp. 260-261他参照）。確かに4:44と5:1の間に一つの区切りがある点是否定できないが、ルカ福音書においては5:1以降も、ゲラサ人の地方での活動報告記事（ルカ8:26-39）を除けば、イエスは原則としてガリラヤ地域で宣教活動を行っている点は無視できない。イエスの宣教が実際にガリラヤの枠を越えるのは9:51以降である。

ているナザレ説教の記述とは対照的に、カファルナウム宣教の記述においては、悪霊追放と病人の癒し等の行為（業）によるイエスの具体的な活動が繰り返し描かれている。もっとも、この段落においても言葉の権威に言及され（32, 36節）、最初の二つの癒しの業が叱責の言葉（ἐπιτιμῶ）によって実行され（35, 39節）、さらには段落全体が宣教活動に関する要約的記述（31-32節と44節）によって枠付けられていることから伺えるように、決して業に対して言葉による宣教が軽視されているわけではない。事実、最初の癒しのエピソード（31-37節）においては、イエスの癒しの業を目撃した人々は、癒しの業そのものではなく、それをもたらしたイエスの「権威ある言葉」に驚いたのであり、その意味では、イエスの癒しの業そのものよりも、その業をもたらしたイエスの言葉の権威が強調されている。さらに、この「権威あるイエスの言葉」（32, 36節）において、イエスの教えと悪霊追放の行為とがマルコの並行箇所以上に緊密に結びついている点等を勘案するならば、ルカの記述においては、イエスの言葉と業は双方共に重要視され、むしろ両者は不可分なものとして捉えられていると見なすべきであろう。

あるいは、ナザレの人々がイエスを明らかに拒絶し、最後は崖から突き落とそうとしたのに対し、カファルナウムの人々はイエスを歓迎し、留まるように要請したという意味では、双方の記述は正反対の住民の態度を示しているように思える。しかしながら、最終的にはカファルナウムの住民もナザレの住民と同様、イエスの宣教の本質を理解していなかったという意味では、両者とも無理解という点で共通しているともいえる。その意味でも、双方の記述の間には、少なからず相違点はあるものの、それらは必ずしも両者の異質性を示すものではなく、むしろ両者は一対の関係にあり、両者で一体のものとしてルカ福音書の文脈の中で捉えるべきであろう。

事実、イエスの宣教使信を示そうとするナザレ説教の記述も、イエスの具体的な宣教活動について記すカファルナウム宣教の記述も、イエスの弟子が召し出される以前のイエスの宣教活動について語ろうとしているが、これらの記述は、最初の弟子の召命（5:1-11参照）以降、本格的に展開されるイエスの宣教活動（生

涯全体)を先取りする機能を果たしている。すなわち、カファルナウムを去ったイエスは、その後、弟子たちを伴って本格的な宣教活動に着手し、何より言葉による宣教(4:18-19参照)と、悪霊追放と病人の癒し(40-41節参照)等の業による宣教に従事することになるが、ナザレ説教の記述においてすでに暗示されていたように、最終的にはユダヤの民から拒絶され、十字架上で死に至るのである。